



カトリック町田教会
町田市 中町 3-2-1
電話 042-722-4504
FAX 042-722-4512

いかずちの子
http://www.machida-catholic.jp/



イエズスは、霊によって荒野に連れていかれ、四十日の間悪魔の試みを受けられた。(ルカ4:2)

もろともにあはれとおもへ

主任司祭 林 正人

「今日日の子供は『百人一首』なぞするのだろうか？」
未だコロナ禍になる前、ふとかように思い子供たちに尋ねてみたところ、意外や現在も『百人一首大会』等を学校で行っているようで、中には『百首全部憶えてる！』なんていう強者もいました。古典好きの小生としてはいささか嬉しく思いました(因みに私は、百首総ては憶えています)。

百人一首好きの方ならば、額いてくださると思います。カルタ取りをする時、「この一首だけは、絶対他者に獲らせたくない」という「十八番の一首」が、人にはあるものです。私の場合は、六十六番・大僧正行尊の歌「もろともに あはれとおもへ 山ざくら 花よりほかに知る人もなし」が、それに当たります。「共に『あはれ』」と違って、

れ、山桜より、修行のために入った山中で出会った山桜その美しさに打たれ、詠んだ歌と言われています。

ところで、この歌でも使われている「あはれ」という言葉。現代、漢字を充てるならば「哀れ」または「憐れ」「憐れ」は私たちの聖典、『聖書』でも馴染みの単語です。例えば福音書に出てくる「憐れむ」は、原文のギリシア語では「スプランクニズマイ」で、苦しむ人を前に、腸がちぎれるほどに同情するさまを表します(私の大先輩の司祭、故・佐久間彪神父が、この語を「はらわたする」と訳したのは余りにも有名です)。

聖書的な捉え方ですと、「あはれ」は「悲しみ」「苦しみ」のみを意味する言葉に思えてしまいます。しかしながら、日本の古典の世界では、「あはれ」は必ずしも左様な語意ばかり使用される言葉ではありませんでした。「お見事！」を意味する「あつぱれ」も、語源は「あはれ」であるくらいで、要は、喜び、悲しみの別なく、「ああ！」と感嘆詞が附くような事柄は、みな「あはれ」なることであつたのです。福音書中でイエス様が「憐れんだ」と記されている箇所は、総じて「はらわたした」

場面です。しかしそれ以外にも、例えば徴税人や罪人と食事を取りながら語り合った時、イエス様は「あはれ(素晴らしい!)」と感じたでしょうし、子供たちと遊んだ時にも、「あはれ(可愛いなあ!)」と思つたことでしょう。人間を救うために、自らも人となり、人と共に生きたイエス様。世の人々と共に味わつた出来事は、総てが「あはれ」であつたのではないかと思ひます。

自明ではありますが、人間は世を生きる間、喜びも悲しみも経験します。私たちはキリスト者として、隣人の悲しみ、苦しみ、痛みを共有でき

導かれて

運営委員会 原 祥代

町田教会に転入したのは二〇一五年。ごミサに与り、お祈りをする、月に二回日曜学校のお手伝いをするのが日常でしたが、コロナ禍で教会へ行く機会が減少した上、今年から運営委員会のメンバーに加えて頂き、今までのルーティンが一変しました。「運営委員会」：敷居が高すぎて...と言っていた過日が嘘のよう。日常の生活の中で、一般には偶然と言われる神様の助力が働いている事をしばしば実感しますが、運営委員も神様の導きなのかもしれな

るよう努めるべきと考えますが、それだけではなく、彼らの「喜び」にも与らせてもらう。それこそが、「隣人と共に生きる」「自分のように愛する」ということではないでしょうか。未だコロナ禍の中にある私たち、共同体の仲間たち一人ひとりの労苦を思い、祈りましょう。そしていつか、全員でミサを捧げることができるようになった時、私たちの喜びを、最高の笑顔と共に神様にお捧げ致しましょう。共に泣き、共に笑う共同体として。「もろともに あはれとおもへ 町田教会(字余り)」

いと一歩を踏み出し、教会の事を何も知らないのに何が出来るだろうか? という自縛は止め、出来る事をする、導かれるままに全うしようと思ひました。運営委員になるまで、恥ずかしながら、教会組織の全体像すら知りませんでした。他にも毎回の議題でさまざまな事を現在勉強中というありさま。皆さん、多才で色々なアイデア、違った視点での意見が飛び交い自分と異なる思考に、なるほど...、確かに...と目からウロコも多々あります。

そんな新参者ですが、神父様をはじめ、委員の皆様は男女の壁、年齢の壁を取り除き一メンバーとして温かく迎えて下さり、教会での新たな居場所を得た感じでした。

運営委員会での役は消毒当番と、私でいえば地域プロック担当。緊急事態宣言が度々発出される中、運営委員会の決定事項の連絡にも支障を来しています。プロックを超えての連絡はままならず、プロック内での連絡はメール、電話、ファックス、手紙と多様な手段で時間を惜しまず連絡をして下さっている現状を知りました。

昨年からごミサも普段のスタイルとは違った感染対策をしつつの進行、参列者の制限、ユーチューブ配信等、試行錯誤を重ねています。

半年経過し、あたり前に見えていた事が、そこまでの過程に沢山の配慮や、多くの方の尽力がある事を改めて認識させられました。では、私は。。。いやいや、考える事はやめて、微力でも感じるままに働き、コロナという暗闇の中、祈りと共に光を探そう。

一日も早い終息を願いつつ、また教会に集えるようウィズコロナに方向転換する事で何が出来るか、神様の呼びかけに従いたいと思います。

感謝と喜び

汚れなきマリア修道会 Sr.吉村 瑠美子

二〇二一年七月三十一日、この日、私たち汚れなきマリア修道会にとって大きな感謝と喜びの日となりました。ベトナムから入会された二人の姉妹が、全生涯を決定的に神様に奉獻する終生誓願を宣立いたしました。

コロナ下ということで、ベトナムから御家族をご招待し、共に喜び祝うことが出来ず、日本に在住されるご親族の方々と、那須のトラピスチンのシスターになっていらっしゃるお二人の姉妹をお招きしてのお式となりました。

ベトナムの御家族や、創立された私たちの修道院の姉妹たちのためライブ配信することができ、心を合わせて祈り喜びを共にすることができたことは、大きな慰めとなったことと思います。

二人の姉妹は、本来ならば去年の七月に終生誓願宣立の許可を総長から与えられていました。しかし、昨年一月より五月まで、本会創立の地であるフランスとローマ本部において行われた誓願宣立準備の国際研修会に参加して、その終了時、コロナ禍のため日本への帰国ができず、ロー

感染 教皇フランシスコのメッセージ

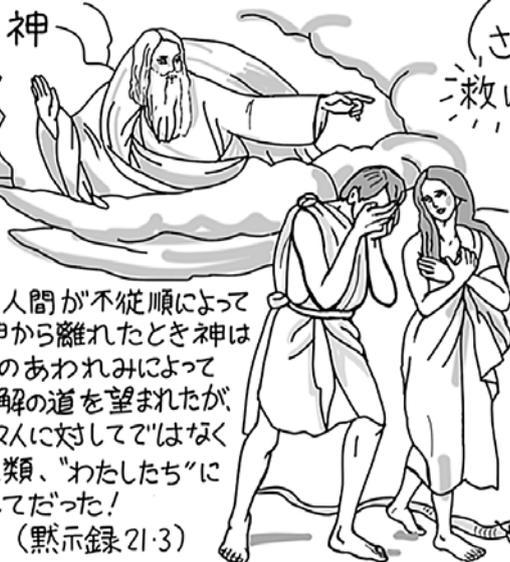
カトリック中央協議会 (イラスト:ポ.池永廣美)

第107回「世界難民移住移動者の日」 「さらに広がる「わたしたち」へと向かって、

「すべての人を一つにして くださ」(ヨハネ17:21)

るために、死んで復活されたキリストの神秘がある

救いの歴史の中心



わたしのお気に入りのイメージは、五旬祭での教会の「洗礼」の日に聖霊が降った直後に救いの知らせを耳にするエルサレムの人々です。(使徒言行録2:9-11)

まずカトリック信者、次に世界中のすべての人に呼びかけます

人類全体

わたしたちを隔てる壁をなくしてともに歩むよう!



人間が不従順によって神から離れたとき神はそのあわれみによって和解の道を望まれたが、個人に対してではなく全人類、「わたしたち」に対してだった! (黙示録21:3)

利己的な自己防衛 大量消費 最悪の反動

他の人たちではなく「わたしたち」であるように!

祈り 聖なる、親愛なる御父よ、御子イエスは教えてくださいました。天には大きな喜びがわき上がることを。それは、失われていた人が見つかる時、排除され、否定され、見捨てられてきた人をわたしたちの「わたしたち」に取り戻すときです。こうして「わたしたち」は、ますます大きくなるのです。イエスのすべての弟子たちと、すべての善意の人にこの世であなたのみ旨を行う恵みをお与えください。国を追われた人たちを、共同体である「わたしたち」教会である「わたしたち」のもとに戻れるよう、迎え入れ支える行動の一つ一つを祝福してください。それによってわたしたちの地が、あなたが造られたとおり、すべての兄弟姉妹の共通の家となりますように。アーメン

救い主の未来は神の霊に導かれたビジョンの時代(ヨエル3:1) (ビジョン) 地球の息子、娘

夢見ること恐れはなりません

マ本部に足止めとなり、帰国できたのは十月でした。

コロナ感染症は一向に終息への兆しがないままに二〇二一年を迎えてしまいました。

これ以上の誓願宣立の延期は賢明ではないと判断し、七月末と月を定め、菊池大司教様に司式をお願いしましたところ、私たちの希望をお受けいただくことができました。

誓願宣立式は管区本部の調布で行われ、大司教様を主司式者とし、マリア会、サレジオ会の司祭方と町田教会の二人の神父方による共同司式ミサの中で行われました。

「あの方の言うことは何でもその通りにしなさい」とのマリアの言葉を心に、マリアの娘としての新たな出発をいたしました。以下に二人の姉妹方からの教会のみな様へのご挨拶を記します。

主よ、私の生涯をあなたに

Sr.マリア・チャウ

Sr.テレサ・ニユオン

私たちは去る二〇二一年七月三十一日に終生誓願を宣立しました。この日を迎えられるのは神様のお恵みはもちろん、多くの方々のお祈りと支えのお陰だと確信しています。この大きなお恵みを、所属している町田教会の皆さまと分かち合うことができればと

願っていましたが、コロナ感染拡大によってそれは叶いませんでした。でも、皆さまはきっと私たちのためにお祈りをしてくださったと思います。この場を借りて皆様に感謝の気持ちをお伝えし、自分たちの召命について少し分かち合わせていただきたいと思います。

私たちはベトナムのカトリック信者の家庭で生まれ、小さい時から教会に通ってまいりました。毎日、朝と夜、教会に行つてごミサと祈りをし、教会の方とよく関わりを持っていました。生涯を神様に捧げ、人々に奉仕するシスターの方の姿を教会で見て心が惹かれました。私たちもそのようになりたいなどと思っていました。外国の修道会に入会することは思いも寄りませ



んでしたが、自分の召命を識別する時に、たまたま本修道会のカリスマと精神について紹介されました。「マリアを通してイエスへ」という本会のモットーが心に強く響きました。この修道会に入ることがを希望し、修道会から受け入れられて日本に生まれました。

修練期の時から、少しずつ町田教会の方々と関わりを持つことができるようになりました。特に教会でのクリスマスや復活徹夜祭のごミサに与り、バザー、おにぎり作り会、教会のお掃除などを通して片言の日本語でも楽しく、皆様と交わりを持つことができて

嬉しく思っていました。皆様 が忍耐強く耳を傾けてくださったお陰と感謝しています。今コロナ感染拡大によって教会に行くことも制限され、思い通りに色々なことを進めることができませんが、一日も早くパンデミックの終息の日を迎えることができるようお祈りしています。

入会してからあつという間に十年経ちました。この間を振り返ってみると、難しいところがありました。喜びもいっぱいありました。私たちは日本人のシスター方と共に生活していますので、言葉の壁や文化の違いがあります

が、それらを超えてお互いに理解し合うことによつて豊かになつていると感じています。日常生活の様々な出来事を通して、自分たちがどれほど弱いものであるかをしみじみと感じていますが、神様の変わらぬ愛とマリア様の同伴を信じながら一生涯イエス様についていきたいと心から望んでいます。

終生誓願ミサで歌われた拝領の歌「主よ、私の生涯をあなたに捧げます」の気持ちをもち、日々を過ごすことが出来たらと願いつつ、皆様からの支えとお祈りをこれからもよろしくお願い申し上げます。

特別寄稿

野原と原野の原風景と原町田

京都教区司祭 菅原 友明 (桃山教会)

「雷の子」337号の小田神父様の文章を読んでいて鮮明に甦つた記憶があります。町田教会で助祭として実習させていただいた折り、幾度かミサの説教を担当させていただいたのですが、ある土曜日の夜のミサが終わった後、小池神父様から「今日の説教は苦戦した？」と言われたことがありました。その日の福音に「王は怒り軍隊を送つて、この人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払った」(マタイ22:7)という一節があつて、この情景が曲折した形で私をとらえてしまい、理解困難な説教になつてしまつていたので。神父様の控えめでさりげないご指摘に感謝しつつ、翌朝のミサまでなんとか修正した一夜が思い出されます。

その時の私の心をとらえてしまつていたものは、都市ができる以前の町田界隈、多摩丘陵から相模原台地にかけての一带の原風景だったのです。果てしなく広がる原野・野原に風がわたつていく颯爽とした光景と、今に残る原町田、相模原、大野、淵野辺、原当麻というような地名が共鳴し、さらには小田神父様の表現を借りれば「町を併せ持つ町田教会」の魅力も重なり合つて、独りよがりの物語が説教台から語られる不祥事を招いてしまつた次第です。それにしても原町田という地名はなんとも味わい深いですね。コロナが収束したらまた町田や相模原を歩きたいです。

大きな願い

地の星 安達 利恵子

地の星では8月15日の終戦記念日に「すいとん」をいただきます。具がたっぷり栄養満点の美味なすいとんです。これで食べ戦時中を偲ぶことなどできないのですが、愚かな戦争を終えた日の記念です。

昨今次から次へと災害に見舞われ、新型コロナウイルス感染症に翻弄され続け、76年前の広島・長崎の原爆投下・終戦への思いが希薄になってきているのでは、と心配です。

50年ほど前、修学旅行で長崎に行きました。異国の香りたっぷりの素晴らしい街で、永井隆博士著の『この子を残して』に出会いました。永井隆博士はNHK朝のドラマで「長崎の鐘」の歌に関連して登場したようで、ご存じの方も多いと思います。

永井博士は、原爆投下後の被災地で自分も被爆者でありながら、率先して救命活動をされ、やがて脾臓がとんでもない大きさに腫れあがり「如己堂」で闘病生活に入ります。

誠司君とカヤノちゃんの子を残して死にゆく切々たる思いが、『この子を残して』に溢れています。修学旅

行では、この如己堂の見学は、なく残念でなりません。後年、新婚旅行で再び長崎を訪れ、如己堂を探しました。今なら「スマホ」が簡単に導いてくれますが、当時は難儀をし、やっと見つけた如己堂は、大人の布団を一組敷けるだけの狭さで、ここで二人の幼子と暮らしていたのだと思うと胸がひりひりしました。

博士親子のような境遇やもつともつと悲惨な状況が長崎、広島、そして空襲に見舞われた都市のあちこちで起こっていました。

1981年に来日したヨハネパウロ2世教皇は「戦争は人間のしわざです、戦争は死です」とお話しくださいました。永井博士は深い信仰に生き、被爆を神の摂理と誰も恨まずに受け入れ、それがどうしても腑に落ちませんでした。が、教皇の言葉ですっきりしました。

原発事故やコロナを含む現在の災害も、私達の生き方に原因があると思います。便利さや効率の良さ、合理的であることばかりを追い求め続け、何でも知りたがり全てを支配しようとする。たとえば「遺伝子組み換え」植物なんて誰の許しを得ているのでしょうか。76年前に多くの犠牲により、終結した戦争に思いを馳せ、

誰もが平和に暮らせるよう願っています。

「雷の子」8月号恒例の「終戦記念日特集」に代わり、著者の了解を得て「地の星」8月号から転載しました。

堅信式 (10月3日)



昨年から繰り延べになっていた堅信式が、菊地大司教をお迎えして挙行された(受堅者は総勢18名)。同時に熊坂直樹神学生の朗読奉仕者選任式もおこなわれた。

お詫びと訂正

「雷の子」336号実行体制Iの地域ブロック連絡員のお名前に誤植がありました。お詫びして訂正いたします。

- ・小溝茂雄 ↓ 小溝茂夫
- ・水元久子 ↓ 水本久子

信者動静

2021年6月～10月

(個人情報のため、削除しています)